

教育再生会議を現場から評価

(地域で)「私、初めての出産・子育てで不安なの。」「大丈夫よ。『案ずるより産むが易し』ってね。そうそう、母乳がもし出るんだったら母乳で育てた方がいいわよ。」

(職員室での「ストーブ談義」)「教育委員会は『授業時数確保しろ』って言いますが、来年の演劇鑑賞会どうしましょうか。」「やろうよ。本物の芸術にふれるのも、下手な授業やるより大切かもしれないよ。」

(居酒屋で)「どうもクラスの〇〇君と、うまくいかないんですよ。」「生徒の目を見て、生徒の話をまず聞くことが大事だよ。」

(保護者と教員との雑談)「先生、こないだテレビの『30人31脚』観てて、感動しちゃったんですけど、この学校でもできないかしら。」「あ、あれ私も観ました。よかったですよねえ。」

差別的なゴシップ談義や、人の陰口などはいただけないが、こういうあたたかい雰囲気「井戸端会議」は、実はとても大切だった。そういう中から、言葉にしにくい日本の教員の「文化」が伝承されたり、子どもの発信するSOSに気づかされたり、思わぬアイデアが生まれたりした。

過去形で書いた。地域や学校から、こういう時間がどんどん削られ、保護者も教職員も猛烈な忙しさの中で、競争に駆り立てられ、孤立し、仕事に対する「ゆとり」と「ほこり」を失ってしまった。格差の広がりも深刻だ。姜尚中氏は、ある論文の中で「地域の疲弊、都市と地域との格差が確実に広がっており、医療や教育などの現場が劣化するということが起きています。新しい貧困が生まれていますが、子どもを持ったことで、教育費で貧困になる例も多い。そういう中で出てきた子どもの問題は、躰とか親学といった甘ったるい話ではないわけです。最大の問題は、人並みに生きる条件が根こそぎないということです。」と述べている。同感である。

教育再生会議に、期待したかったのは、こういう現実を変えてくれるしくみ作りだった。(集められた顔ぶれをあらためてながめてみると「ないものねだり」だったなあとと思う。)
「あなたたちが井戸端会議をやっていてどうする！やるべきことがちがうだろう！」会議のメンバーに言いたいことはこれに尽きる。

新聞報道などで教育再生会議の議論をかいま見るたびに「なんじゃこれは？」とあきれてしまっていた。私のまわりの教員にも、そういう感想を持つ人が多

かった。しかし、ただ、あきれていては、いけなかったのだとも思う。

教育基本法を「改正」した現政権の、教育「改革」の意図は明確である。一言で言えば

「主権者としての国民を、国に奉仕する（戦争になれば進んで命を投げ出す）臣民につくりかえること」だ。そのために教職員や保護者の「横のつながり」を分断し、「縦のつながり」を強化する。きわめて拙速に強行採決された教育三法にも「教育委員会への国の関与」「教員身分の階層化」「教員免許更新制」「奉仕活動の導入」「『道徳』教育重視、愛国心の評価」と、その意図は貫徹されている。

教育再生会議は、その「目くらまし」の機能を持たされた。冒頭の4つのエピソードは、私の創作であるが、内容はいずれも教育再生会議での発言から引用した。教育とは別の分野の「有名人」を集め、井戸端会議のような議論をさせる。その中から、彼らのめざす「美しい国」づくりに役立ちそうなところだけを取り出し、大急ぎで法案化。あれよあれよというまに採決。今思えば、教育三法の強行採決は、選挙で大敗することを見通して「今のうちに、やれることはやっておこう」ということだったのかと思えるほどだ。

やや、横道にそれるが、教育再生会議の内閣官房担当室室長から参議院議員に転身した『ヤンキー』義家先生の動きは、腹立たしいが興味深い。今の彼を支えているのは何か？ヒーローとしての自分への自己陶醉か？それとも確信犯か？彼のホームページの無内容な教育政策から推測するところ、前者の気配が濃厚で、それを政治的に利用されているような気がする。それはさておき、彼が「再生」し、教員となった母校、北星余市高校の元生徒と話をする機会があった。先生たちの、生徒と「とことん話し合う」姿勢は素晴らしかったと語っていた。そういう学校を、なぜ彼は退職し、再び「転落（と、私は思う）」の人生を歩み始めたのか。

何となくわかるような気がする。つまり、学校教育という営みは、一人ではできないということではないか。私は中学校の教員をしていたが、以前、次のような文章を書いたことがある。（プライバシー保護のため、少し、脚色している。）

「自己申告」というオブラートにくるみながら、教職員を「能力・実績」によって評価し、賃金に差をつける人事考課制度が導入されようとしている。教育という仕事の成果を1年ごとに区切って評価できるのか？。そもそも評価す

る物差し（基準）は何か？。今のしくみの中で生まれた「ふつうの」管理職に、我々の評価ができるのか？……いくつもの「？」に加えて、次のような問題も大きい。

夏休み明け、私のクラスのYさんが、すさんだ表情で髪を茶色に染めてきた。授業態度も投げやりで、学校外の生活も乱れているようだ。私は、すぐに仲間に相談し、役割分担を提案する。ある教員は、享樂的生活への誘惑にすぐのっってしまう彼女の弱さを厳しくしかり、ある教員は共感的に事情を聞き、家庭訪問をして保護者とも話し合う。ある教員は部活動の友だちに協力を頼む。さらに養護教諭（保健室の先生）、教育相談員、管理職、さまざまなスタッフが協力して動く。この連携プレーのうまくいく学校が、良い仕事のできている学校と言える。さて、Yさんが再び元気に学校生活を送れるようになったとき、それは、どのスタッフの能力・実績として評価されるのだろうか？。

「民間の職場では、能力給はあたりまえ。あまえるな。」という批判を聞くことがある。私は「評価」そのものを全否定するつもりはない。ただ、現在進められようとしている制度は、公平・公正、客観性、納得性、透明性のあるしくみとはとても思えない。逆に、職場の協力体制を分断する危険なものと言わざるを得ない。拙速な導入に反対である。

以上をまとめて「青春時代（森田公一とトップギャラン）」の替え歌を作ってみた。

3月までの1年で 答えを出せと言うけれど
私の教育実践を 何で計ればいいのか
あいつ（管理職）に評価ができるなんて
机上の空論で思うもの
学校現場のまん中は
一人じゃできないことばかり

ヤンキー先生の最大の問題点は、個人プレーで物事が解決できると考えているところではないか。いや、これは言い過ぎかもしれない。目の前でおぼれている子どもがいれば、とにかく水に飛び込む、と言う気持ちは元同業者としてよくわかる。しかし、冷静に教育のしくみを問うべきとき（教育再生会議）に、現場スタッフの連携の大切さ、それを妨げる障害を取り除くことが教育行政の仕事であるという視点が、ヤンキー先生には、薄弱、もしくは欠落していると思う。

原子力発電所の事故が相次ぐ中、バッシングされる原子力発電に意欲的にかかわろうとする技師が減っているという恐ろしい話をきいた。これによって、

原発事故の危険性はますます高まるであろう。過酷な現場の実態に起因する産婦人科や小児科の医師不足も深刻だ。医療事故の危険性……。そして、学校現場でも同様のことが起こりつつある。

さまざまな人生を背負った生徒の集まる学校というところは何が起こるかわからない、一人一人の悩みに寄り添い、共に生きるためには車のハンドルに例えるなら「あそび」が必要だ。今の、学校現場にそれは皆無である。日本の教員は、大切にされていない。

今回の「改革」は、極めて危険な、戦争のできる国づくりの一環である。これによって職場の協力体制はますます失われ、教職員はさらに過酷な状況に追い込まれて行くであろう。そのお先棒を担いだ「教育再生会議」の罪は重い。教育再生井戸端会議は、教育破壊会議である。